

# 大学における男女共同参画推進の教育的意義 —講義と対話の組み合わせによる学習者の意識変化—

■ 廣瀬 淳一（高知大学安全・安心機構）

## はじめに

1998年（平成10年）10月26日大学審議会答申における「21世紀の大学像と今後の大学の改革方策」<sup>（注1）</sup>の「課題探求能力の育成—教育研究の質の向上—」では『21世紀初頭の社会状況の展望等を踏まえると、今後、高等教育においては、「自ら学び、自ら考える力」の育成を目指している初等中等段階の教育を基礎とし、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探求能力）の育成を重視することが求められる』と述べられている。また、高等教育においては「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探求能力）の育成」が重要とされた。今日、核家族で少子高齢の日本社会ではライフ・イベントと仕事の両立、そしてキャリア形成や働き方の再考など、広く人生に関わる事項について解決すべき喫緊の課題が山積している。このように考えると、学生が主体的に自分の将来の課題を探求するために、身近なライフ・イベントを教材に取り上げることは教育的意味があると言え

よう。

国立大学法人高知大学（以後、高知大学）は、2012年2月に「高知大学における男女共同参画の基本理念・方針」を制定し、大学は「学知の拠点として、次世代育成の母体として、さらには地域社会の発展の基盤として、大学は男女共同参画社会を実現するための先進的なモデルを提示する立場」にあるとしている。そして基本理念に、高知大学は『男女共同参画を大学で実践し、教育につなげ、そして社会に広げる』との考えのもと、男女双方にとって、学びやすく働きやすい場、個性と能力をよりいっそう発揮できる場を形成することに努めます』と掲げる。つまり、大学を構成するすべての男女がその能力を発揮できる職場環境・教育環境を築き、男女共同参画の視点に立った教育を通じて、男女共同参画社会の形成に寄与する人材を育成し、そして大学での実践を社会に向けて発信することを男女共同参画の基本方針としている。

本研究の特色は、大学における男女共同参画の推進が単に意識啓発を目的とする取り組みではなく、大学全体の教育や社会実践として当事者性から課題探究に向き合うことによって、人間社会を持続的に継続し、社会の形成と維持に貢献できる男女共同参画の視点を持った人材育成の方法について考える点にある。本稿では、学生が学問を通じて社会の常識の非常識に気付

<sup>注1</sup> [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_daigaku\\_index/toushin/1315932.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm)（2014年12月11日アクセス）

き、周囲との意見交換によって自分の意見を相対化し、グループワークでの合意形成を通じて、社会実践として活かせる男女共同参画の授業のあり方について考える。はじめに主体を意識変化に導く教育について考え、今日の社会における男女共同参画について概観し、自分が生活する社会の常識・非常識を認識することの難しさについて確認する。そして、高知大学における男女共同参画の教育実践の長所短所を明らかにし、男女共同参画の推進を通じた「主体の意識を揺り動かす教育のあり方」について考えたい。

## 1. 主体の意識と学び

ノートや本に記された文字を食パンに写して食べると、その内容が確実に暗記できる。これは藤子不二雄著のコミック『ドラえもん』に登場する未来の道具「暗記パン」である。また、1999年9月11日に日本で公開されたアメリカ映画『マトリックス』(The Matrix)では、これまで現実であると思っていた「生活」が「マトリックス」と呼ばれるコンピューターの仮想現実の中の出来事であったと気付かされ、現実世界との境界線上で悩みながら敵に立ち向かうキアヌ・リーブス演じる主人公トーマス・アンダーソンは、ヘリコプターの操縦方法や特殊な銃器の使用法をオンデマンドで自分の脳にダウンロードし、瞬時にその能力を身に付けることができた。「のび太」も「アンダーソン」も、「主体としての意識はそのままの状態で知識や技能を使いこなしたい」と考えている。このような話に触れるたびに、楽をして知識や技能を習得したい願望には人間にとってある種の普遍性があるのかもしれないと思う。話を付け加えれば、『ドラえもん』では登場人物の「のび太」が暗記パンの食べ過ぎで下痢を起こしてしまうため、暗記した内容を忘れてしまったというオチになっている。

さて、大学は研究と教育の「場」であるが、講義の「単位」を楽に取得したいと考える学生はいつの時代にも一定数は存在する。このような学生が希望するのは、主体としての意識はそのまま卒業の要件を満たす程度に苦勞なく知識や技能を習得することである。

そのように考えれば、レポート提出のような作業は情報をインターネットの検索エンジンで探すことができればこと足りる。しかし、思想家の内田樹(2008年)が、「学ぶ」ということは「自分が何を知らないかについて知ること」、つまり「学ぶ」とは「同一平面上で水平移動を広げる」ような「知識を増やす」こととは異なり、「階段を上ること」によって「自分の知識についての知識を知る」と述べているように、人間が知識の階段を上れば主体の意識も変化していく。学ぶ前と後では意識が異なる人間に変化するかもしれないのである。学生が、「学ぶ」ことを「知識を増やす」ことであると考えがちなる理由として、内田は受験勉強を挙げている。内田によれば、元来の意味において勉強とは「自分が何を知っているか」ということが「自分の知らないこと／自分に出来ないこと」の地図上に位置づけられて初めて共同的な意味を持つ。しかし、「自分が何を知っているか」を誇示しようとする受験勉強には、「自分の知らないこと」は「知る価値のないことだ」と子どもたちに思い込ませる傾向があると指摘する(内田 2010)。内田はさらに、このような教育が「受験に不要な科目なんか勉強しなくてもいい」という考え方に同意を与え、「就職に不要な科目なんか勉強しなくてもいい」という価値観に広がると主張する(内田 2010)。

先述の大学審議会答申の「課題探求能力の育成—教育研究の質の向上—」では『21世紀初頭の社会状況の展望等を踏まえると、今後、高等教育においては、「自ら学び、自ら考える力」の育成を目指している初等中等段階の教育を基礎とし、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」(課題探求能力)の育成を重視することが求められる』と述べられている。つまり大学審議会では、かつてのような主体の意識では、大きく変化している社会のなかで、具体的な課題解決に当事者として臨むことは難しい状況にあると判断していると考えられる。裏を返せば、かつては「個人」が主体的に対応しなくても、社会がつくった仕組みにうまく身を任せてベルトコンベ

アーに乗ることさえできればそれなりの場所に運んでくれた時代があったことを意味している。社会学者の山田（2004年）は、人材を就職先まで安定的に供給する学校の仕組みを「パイプラインシステム」と呼ぶ。しかし、今の学生はパイプに入ってみたものの、どこかの出口から出たらよいか、かつての様には予測が立てられなくなったと指摘する。このような状況においては、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探求能力）の育成はますます重視されるだろう。

ただ、社会心理学者の山岸（2010）は、世の中の問題、社会の問題を倫理的な説教で解決することはできない、と指摘する。つまり、課題探究能力の育成や世の中の問題、社会の問題である男女共同参画の課題は、倫理的な意識啓発では解決できないと指摘している。それでは、これらの課題解決に必要な能力の育成はどのように行われるべきなのであろうか。

## 2. 男女共同参画を考える

### (1) 日本における男女共同参画

日本では男女共同参画と聞くと「ああ、あの女性のヤツね」という反応に出会うことがある。男女共同参画の視点は「個人」を単位とする男女が共同責任で社会づくりに取り組むという点で、民主主義の基本に関わる重要な考え方である。しかし、私たちはガバメント（政府）が制度づくりを担い、市民がそれに「従う」ことがガバナンス（統治）のあり方であるとは何となく教えられて育ったからであるのか、「俺に黙ってついてこい」（これは、なんか問題が起こったら「お上」のせいという考えの裏返しであるが）という姿勢を当然のように感じてしまいがちである。しかし、日本の男女共同参画の遅れに対する国際的な指摘はますます厳しくなっており、また行政や企業が仮に「俺に黙ってついてこい」と言ったところで、弱体化が著しい「俺」に対する不信感が高まるばかりである。それは、つまりガバメントが制度づくり、市民がそれに「従う」というガバナンスのあり方が、成熟化する日本の社会

には適さなくなっているからである。

そもそもこれまで、日本の男女共同参画はどのような位置に置かれてきたのだろうか。第1表に年表をまとめてみた。1975年から1979年は国際婦人年とされ、1975年にはメキシコシティで第1回世界女性会議が開催された。日本はこの会議の決定を受けて1977年に国内行動計画（1986年まで）を策定した。そして1985年には第3回世界女性会議がナイロビで開催され、日本はこの会議の決定を受けて1986年に女子差別撤廃条約に批准し、1987年に「2000年に向けた新国内行動計画」を策定した。続いて、日本は1991年に新国内行動計画を改定した（第1次改定）。この改定による変更点は、総合目標の記述が「男女共同参加型社会を目指す」から「男女共同参画社会の形成を目指す」に改められたことである。このように表現が「参加」から「参画」に改められた理由は、「単に女性の参加の場を増やすだけでなく、その場において政策・方針の決定、企画に加わるなど、より主体的な参加姿勢を明確にするため」とされた<sup>(注2)</sup>。1995年には第4回世界女性会議が北京で開かれ、各国が1996年までに自国の男女共同参画の政策内容を明確にすることが決定された。日本はこの決定を受け、1996年に「男女共同参画ビジョン」を答申し、1999年に男女共同参画社会基本法を制定した。このように振り返ると、日本における男女共同参画の取り組みは「外圧」に対応した歴史であったようにみえる。しかし、日本社会にとっての男女共同参画とは国際的な外圧を受けねば出来ないほど、困難なコンセプトであったのであろうか。男女共同参画社会基本法の第2条第1号では男女共同参画社会の形成は「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意志によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会の形成することをいう」と定義している。民主主義の日本にとって、この条文のコ

<sup>注2</sup> 内閣府男女共同参画局、「男女共同参画社会基本法制定に至る男女共同参画の経緯」、[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/law/kihon/situmu\\_1-3.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/law/kihon/situmu_1-3.html)（2014年11月22日アクセス）



ンセプトが受け入れられないような内容でないことは明白である。一方で、日本は国際社会から男女共同参画が遅れている国であると指摘されながらも、自他ともに認める安全で衛生的で豊かな社会を実現したことも事実である。日本の男女共同参画の推進がこのように内発的ではなく外圧によって推し進められてきた理由については検討されるべき価値がある。

## (2) 日本の経済発展と男女共同参画

ダボス会議で知られる世界経済フォーラムは2006年からGGI (Gender Gap Index) を発表している。GGIとはジェンダー・ギャップ指数のことで、「経済活動の参加と機会 (Economic Participation and opportunity)、教育 (Educational Attainment)、健康と生存 (Health and Survival)、政治的権限の強化 (Political Empowerment) の4項目から男女格差を指摘している。2014年は調査対象国142か国のうち、1位がアイスランド、2位がフィンランド、3位のノルウェー、4位のスウェーデンに続き、7位のルワンダ、9位のフィリピンなどいわゆる開発途上国が上位にランキングされた。この調査において日本は104位という結果であった。この点に関しては、日本はむしろ国際的に低いランキングにありながら、経済開発を成し遂げている理由を世界に対して説明する責任がある。

世界経済フォーラムの関心はその名が示すとおり経済活動にある。日本の経済産業省経済社会政策室は、世界経済フォーラムの役員であるIMF (国際通貨基金) のラガルド専務理事の言葉を引用し、「急激な高齢化による日本の潜在成長率の低下に歯止めをかけるには、女性の就業促進がカギ」として「日本の女性労働力率が他のG7 (イタリアを除く) 並みになれば、1人当たりGDP (国民総生産) が4%上昇し、北欧並みになれば8%上昇する<sup>(注3)</sup>」と述べた (経済産業省2014)。また同室は、アメリカのヒラリー・クリントン国務長官の演説<sup>(注4)</sup>を引用し、「日本の女性労働力率

が男性並みに上昇すれば、GDPは16%上昇する」と紹介した。さらに、同室は、「342万人の女性の潜在労働力 (就業希望者) の就労により、雇用者報酬総額が7兆円程度 (GDPの約1.5%) 増加」と説明している<sup>(注5)</sup>。安部総理大臣は2013年 (平成25年) 4月19日の「成長戦略スピーチ」で、「優秀な人材にはどんどん活躍してもらおう社会をつくる。そのことが、社会全体の生産性を押し上げます。現在最も活かしきれていない人材とは何か。それは女性です。(・・・省略) 女性の中に眠る高い能力を、十二分に開花させていただくことが、閉塞感の漂う日本を、再び成長軌道に乗せる原動力だ、と確信しています」と述べている。

これに続く2013年 (平成25年) 6月14日の「日本再興戦略～Japan is Back」の総論では、女性の力を最大限活かすために、2020年までに女性の就業率 (25歳～44歳) を現状の68%から73%にする。そしてM字カーブ問題の解消を目標に、待機児童対策、女性の活躍を促進する企業の取組みを後押しする必要性を強調した。日本経済は人口減という現象もあり、経済的に低迷しているので、これまでその能力が十分生かされてこなかった女性に登板してもらい、人口減による経済活動の停滞を補ってもらおうとする考えにみえる。この「成長戦略スピーチ」は、読み方を変えれば、「これまでは優秀な人材にとって活躍しにくい社会があった。最も活かしきれていない人材は女性である。女性は高い能力を眠らされたまま十二分に活躍することがし難かった。閉塞感の漂う日本経済を再び成長軌道に乗せるのは女性の活躍である」と言っている。本来であれば労働力については、性別や年齢によって一律に分けるのではなく個別の事情や能力が配慮される仕組みが作られるべきである。しかし、そのようにしてこなかった事実は、「そうすることによって高度経済成長を成し遂げ、先進工業国となった」、少なくとも「これまでの日本社会では、そのような状況に置かれてい

<sup>注3</sup> 経済産業省社会経済政策室作成の資料「成長戦略としての女性活躍の促進」で、2012年10月発表のIMF 1 WP「女性が日本を救うか?」をもとに紹介したもの。http://imf.org/external/pubs/ft/wp/2012/wp12248.pdfを参照。

<sup>注4</sup> 2011年9月APECの「女性と経済サミット」における演説。http://imf.org/external/pubs/ft/wp/2012/wp12248.pdf

<sup>注5</sup> 経済産業省社会経済政策室作成の資料「成長戦略としての女性活躍の促進」で、男女共同参画会議基本問題・影響調査専門調査会報告書 (平成24年2月) を出所として紹介している。

るなかで経済発展を遂げてきた」という日本の成功体験に裏付けされた価値観が存在しているということである。

### (3) 日本の経済社会モデル

女性解放の国際的な運動が起こったのは1960年代から70年代のことである。今でこそ男女共同参画の先進地域である欧州も、かつては既婚女性の労働を制限する法律が根強く残っていた。例えば、フランスでは女性が夫の許可なく働けるようになり、その給料を振り込むための預金通帳を（夫の許可なく）妻の名義でつくるのが法律で認められたのは1965年であった（民法典221条 1965年7月）。1970年代になると世界的な経済不況の時代が始まり、欧州でも男性の片働きでは家計を賄うことが難しくなった。そのため女性の就労が進み、家事・育児と仕事の両立、ワーク・ライフ・バランス、時短勤務やワークシェアリングなどに代表される働き方の改善が進んだ。日本はこの運動に対応しきれなかったのだが、IMFのラガルド専務理事の“Can Women Save Japan?”によれば、1970年代日本の女性就業率は50%台であるのに対して、オランダは20%台であったとされ、日本の女性の就業はオランダと比べても進んでいた。しかし、オランダはその後パート労働者の待遇改善に取り組み、同一労働同一賃金を導入することで労働時間の選択制を実現し、90年代には日本との関係も逆転させた。現在のオランダは北欧並みの女性就業率を達成している。

欧州が経済不況に陥っている頃、日本は団塊世代の「人口ボーナス」期を謳歌していた。労働人口の移動により若年層が地方から都市に集中し、三世同居や地縁・血縁社会は衰退し核家族化が進行した。職場ではライフ・イベントによる仕事の中断リスクが少ない男性従業員に集中的に労働を担わすことで業務の効率化を図ったとも考えられる。年功序列や終身雇用の日本型経営様式が転職等による労働移動を抑制したため、職場は長時間労働の人員を確保することができた。男性は家事・育児・介護や地域活動の時間を職業活動に充てるのが当然と見做されると、地域社会の生活

者としては「いびつ」な役割の存在となっていた。その一方で、男性労働者が喪失した「地域の生活者としての役割」を妻が補完することで「専業主婦」が生まれた。かつて経済的に裕福な家庭のみで実現されていた「専業主婦」の暮らしに対する憧れがこの現象を加速化させたということもあるのかもしれない。職場は家事・育児・介護や地域活動への従事を考慮しない「男働き」が可能な人材を労働者として想定しているので、「男働き」の職場文化から見れば、子どもやお年寄りも利益追求のネガティブ・ファクターになりかねない。経済成長の成功体験は、経済の成熟化を経て右肩上がりの成長が続かなくなった現在も、長時間労働の「男働き」を労働者のベースラインに仕立てている。

健全な社会の構築にとって、女性の社会参画が極めて重要な要素であることは疑いない。しかし、2(2)で言及した女性の活躍促進は「男働き」の役割に女性に従事させて経済活性化に向けた「最期」の総力戦に引きずり込もうとする戦略が見え隠れしていることも否定できない。もし、生活者として「いびつ」な「男働き」様式を補完するために専業主婦を誕生させたと考えるならば、その働き方にそのまま女性を参加させれば、地域の生活者として「いびつ」な働き方を補完するための「何か」が必要になる。その「何か」として、子育て・介護支援のサービスや、コミュニティ力に外部委託（out-sourcing）することを期待している者もいるが、コミュニティへの働きかけを含めて、このサービスを利用するための受益者負担は決して軽い。サービスの利用者が自分の労働で得た収入を充てて生活者の役割を下請けに出すといっても、（誰からかの）補助金等がなければ、そのサービスを請け負う側の賃金は当然ながら利用者のそれよりも低く抑えられる。もしそうなれば、生活者自身が自分の家事労働の経済的価値をますます低く見積もることになる。さらに考えなくてはいけないのは、もし男女共に家事労働平均30分の働き方を標準とするならば、その社会の生活はどのように変わっていくのかについて良く吟味してから、社会をもう一度デザインし直す必要があるということである。議論としては、開発途上国の労

働者を家事・育児・介護等の労働者として日本人家庭に導入しようとするものもある。しかし、その場合、私たちは便利さを語るのと同じくらい、またはそれ以上の課題への対処を覚悟する必要があることを念頭に置かななくてはならないだろう。女性の活躍促進を持続可能なものにするためには、男性も女性もが参画して、男性の働き方（第2表）の見直しと同時に進める必要がある。

#### (4) 社会の課題と男女共同参画の視点

次に「男働き」社会の仕組みと社会問題について見る。日本は経済発展を遂げた先進工業国であるが、実は児童の貧困は解決すべき喫緊の課題となっている。2010年の OECD 「貧困率の国際比較」では日本の相対的貧困率は OECD 加盟国34か国のうち29位で、児童の相対的貧困率も25位と国際的に見ても低位にある（第3表）。さらに、子どものいる世帯の貧困率では、2人以上の大人がいる世帯でも24位と低位にあるが、大人1人の世帯については33位と韓国と並んで OECD 加盟国のなかで最下位の状況である<sup>(注6)</sup>。大人1人世帯について、表4の「母子・父子世帯の親の雇用形態、年間就労収入階級別構成割合(2006)」によれば、母子世帯の総数1217世帯のうち482世帯が臨時・パートの労働形態であり、その92.1%が年間就労収入200万円以下である。一方で、父子世帯では調査項目に臨時・パートはないが、総数161世帯のうち、75%が常勤雇用者（121世帯）で年間就労収入が400万円以上の世帯が51.2%となっている。ここから、大人1人世帯の児童の貧困が母子世帯に多いことが推測できる。

経済のグローバル化と価値の多様化が進み、かつての高度経済成長の実現にとっては、ある意味で日本社会に適合していた「男働き」の仕事スタイルは現在の生活には適合しなくなっている。第5表は女性の労働力率を表す M 字曲線を示している。M 字曲線は日本や韓国に特徴的に見られるものであるが、開発途上国

も含めて世界ではマイナーな現象となっている。この M 字曲線では、日本人女性の労働力率は25歳あたりから減少し、30歳頃から45歳頃にかけて緩やかに上昇していく。このことは、日本では女性が結婚や出産を機会に仕事を辞めて家事育児に従事したのち、子供の成長とともに再就労する傾向があることを表している<sup>(注7)</sup>。しかし、日本では再就労の際に正規職員のポストを得ることが難しい状況が指摘されている。このことは、再就職する女性に非正規職員が多い理由のひとつともなっている。先述のとおり、何らかの理由でひとり親が育児をする場合、非正規雇用で働く母子家庭では父子家庭よりも児童の貧困が生まれるリスクが大きい。このような視点からも、女性が結婚出産を理由に仕事を退職することなくキャリアを継続でき、職場復帰が出来る環境が重要であることが指摘できる。第6表は出生数及び合計特殊出生率の年次推移を示しているが、第2次ベビーブームの次に来てもおかしくない、第3次ベビーブームが来なかったことを考えれば、昭和46年から昭和49年の第2次ベビーブームに出生した世代のうち少なくとも者が、就職・結婚・出産・育児などにおいて、その前の世代とは異なる選択を余儀なくされたであろうことがうかがえる。

男女共同参画について学ぶということは、女性に関する課題を学ぶことではない。男女共同参画について学ぶことは、人々が自分の暮らす社会を歴史的に捉え、かつ多角的に分析するなかで、男女共同参画の課題が社会全体の課題であることに気づき、ひとりひとりが参画することによって社会に適したデザインを形成していく営みである。

### 3. 大学における男女共同参画の教育

#### (1) 主体の意識を変える教育

2012年（平成22年）8月28日付の中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を養成する大

<sup>注6</sup> 「子どもの貧困対策の推進に関する法律」（平成25年法律第64号）<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou/0000059373.pdf>

<sup>注7</sup> 日本の女性の労働力率は M 字曲線を描くとされているが、日本においても地域により状況は異なり、例えば高知県は他の都道府県に比べて女性の労働力率の M 字が極めて浅く台形を示している。



学へ<sup>(注8)</sup>』では、「学生に何を教えたか」ではなく、「学生が、何が出来るようになったか」への大学のパラダイムシフトの必要性が示されている。大学は学生に「知識を教える」だけでなく、そのことをきっかけに学生が「何かを出来るようになる」と思えるような働きかけをする場としても期待されるようになったのである。

先述した「暗記パン」や「マトリックス」の件は、主体としての意識はそのままで知識や技能をダウンロードするかのようにな身に付けたいという人間の憧れのあらわれであろう。1998年（平成10年）の大教審が示している「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探究し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探究能力）の育成は、主体としての意識をそのままにして、知識や技能をダウンロードする様に身に付けるのではなく、まさに「主体の意識を変える教育」である。それでは、主体の意識を変える教育はどのように行えばよいのであろうか。例えば、「テレビで見たから知っている」というような知識であっても、課題の当事者としてその知識を実践に活かすことで、何らかの知見を得ることが出来そうである。また、同じ情報であっても、その情報を複数の主体がどのように受信して情報を処理したかを互いに知ること、身近なお互いの異文化に気付くという方法もあるかもしれない。前者には、例えばサービス・ラーニング、PBL (problem/project based-learning) 等のアクティブ・ラーニングがある。このような手法には、教員が深く関与するものもあれば、学生が主体的に企画し関与していく活動もある。このような活動では、学生と周囲の者が「相互に関連し合いながら学生の学びと成長を促すもの」場合が多く、「キャンパスの中、キャンパスの外といった拡張された空間の中で実現される」教育である（山田 2014）。後者には、同世代の若者が就職や結婚、出産、育児、介護についてどのように考えているのか

について、学生同士がお互い面と向かって聞く機会が意外と少ないため、学生が授業の発表や対話を通じて身近にいる同級生や先輩後輩がどのような経験や考えを持っているかを聞き、多様な比較の中で自分の経験や考え方を相対化させる教育が考えられよう。本稿では後者に注目して、平成26年度に共通教育科目で開講した「男女共同参画社会を考える」と同時に高知大学男女共同参画推進室が実施した「キャリア・ジャングルジム」及び「ワールドカフェ：これからの生き方・働き方」を語り合う「男子会×女子会」を事例として、主体としての意識の変化について考察したい。

## (2) 学習と学びのフィールド

学生の学びと成長のフィールドを、正課教育 (curriculum)、準正課教育 (co-curriculum)、正課外教育 (extra-curriculum) に分けて捉える考え方がある（山田 2012）。高知大学においても、正課教育として共通教育科目「男女共同参画社会を考える」を実施している。この授業は平成24年度から開講されており、男女共同参画に関する課題について多角的な視点から考えるという趣旨でオムニバス形式の授業となっている。専門性を異にする教員、そして学生が、人間の生活という部分で課題を共有できる貴重な機会でもある（廣瀬 2014）。ある大学で開催されている「人生と進路選択」のように当事者意識を喚起する授業においては、「人生と職業のかかわりを総合的に理解することによって一人ひとりの学生が自分の将来設計を描くための基本的モチベーションと将来への目的意識を育成・強化し大学で学ぶことの意味と意義を再認識してアイデンティティーの確立（個性の発見と研磨）をサポートする」という目的で、学内の教員と外部講師、職員、在学生が協力するオムニバス形式行われてきた（宇佐見 2012）。

高知大学の「男女共同参画社会を考える」の授業では、行政や地域から招いた外部講師の講義のほかに、高知大学男女共同参画推進室が企画したセミナーと連携させて同時開催するなどの工夫をしている（廣瀬 2014）。例えば、授業にシンポジウムを組込むという

<sup>注8</sup> [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319185\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319185_1.pdf) (2015年2月2日アクセス)

試みがある。ある大学では「大教室での大人数授業であるこの授業は、とすれば講師からの一方的な講義に偏ることが懸念されたために、新しい授業形態として[シンポジウム授業]を導入している」(宇佐見 2012)。また「シンポジウム授業とは、教壇に数人のパネラーが上がり、基調スピーチをしたあとで、科目担当者が司会者となってフロアの受講者からの発言を引き出しながら、シンポジウムのテーマについて討論するというものである」(宇佐見 2012)。

平成24年度から始まった高知大学の「男女共同参画社会を考える」は、4日間のオムニバス講義の初日に2コマ分をシンポジウム方式として開講した。ここでは、学問的な専門性を異にする研究者や実務家が身近な出来事や経験を盛り込みながら自由な雰囲気の中で語り合うことが重視されている。大教室で行われる授業は学生との双方向の対話が難しいと言われるが、高知大学の場合はシンポジウムのアンケートを出席票とするほか、各授業で感想を提出させている(廣瀬 2014)。授業の感想や質問を記入する形式の出席票を使うことは、学生とのコミュニケーションにとって有意義であり、その課題のテーマは「自分の問題として考える」という要素を盛り込んだものである必要がある(廣瀬 2014)。「学生中心の教育」における授業では、「学生本人にとっての自己省察」(宇佐見 2012)を導く工夫が最も大切である。高知大学の場合は、各授業で出席票の自由記述欄に意見や疑問を書いて提出させている。出席票の使い方は担当する教員によって異なるが、筆者は講義のはじめに課題に関する統計データを提供し、学生に自ら考えた仮説を記入させている。そして、授業を聞いたうえで仮説の修正を加えたものを提出させている。これは、学生が自分なりの関心・疑問を持って授業を聞く姿勢に寄与している(廣瀬 2014)。

### (3) シンポジウム型の授業

高知大学では「男女共同参画社会を考える」とコラボレーションして、同期間にシンポジウムを開催した。平成24年度は「自分も幸せに みんなも幸せに

暮らせる社会づくり～『つくる』時代を迎えて～」を開催した。これは行政に任せきりにしてきた男女共同参画の社会づくりに、住民が当事者として「つくる」視点が求められるようになってきたこと、つまりガバナンスの変化に気付くためのシンポジウムであった。基調講演に社会学者である首都大学東京の江原由美子教授を招き、労働、家庭、貧困、育児、介護など仕事とライフ・イベントについて、日本の経済・社会の課題に照らして考える講演が行われた。このシンポジウムのアンケートでは、これまで何となく考えていた就職や仕事と育児の両立等についてリアルに考えた学生の驚きや課題に気づいてしまったことに対する不安が感じられるコメントが目についた(廣瀬 2014)。

平成25年度のシンポジウムは、いわゆる男女共同参画を推進するプログラムのための考え方ではなく、身近なことが男女共同参画に関係していることに気付くことを目的に企画された(高知大学男女共同参画推進室 2014)。シンポジウムの「いろいろかいろ ダイバーシティの視点<sup>(注9)</sup>」と題したパネルディスカッションでは、(株)帝国データバンク高知支店の泉田優支店長の「ダイバーシティ経営はこれからの常識!」、NPO 法人日高わのわ会の安岡千春事務局長の「村民の手作りハローワーク ひとりひとりの個性を活かす取組」、NPO 法人黒潮実感センターの神田優センター長の「島全体がミュージアム!多様な人材を活かす取組の工夫」が事例として報告された<sup>(注10)</sup>。

同シンポジウム時における学生の反応を知るために、アンケートの回答(第7表)を分析してみたい。同シンポジウムの参加者は164人(女性50人、男性114人)そのうち学生は157人で提出されたアンケート用紙は153件であった。共通教育「男女共同参画社会を考える」に履修登録した学生はアンケートが出席票となる。アンケートの質問項目は5つで、① テーマについての関心度(選択肢)、② 男女共同参画に対する

<sup>注9</sup> 「いろいろかいろ」は、いろいろ、あれやこれや、などをあらず高知の言葉。

<sup>注10</sup> 講演の文字起こし原稿は、高知大学男女共同参画推進室「平成25年度男女共同参画支援ステーション報告書」で読むことが出来る(高知大学男女共同参画推進室 2014)



身近度（選択肢）、③ 男女共同参画について関心があるテーマ（選択肢）、④ 就職先を選ぶ上で重視すること（選択肢）、⑤ 感想（自由記述）である。ここでは⑤の自由記述を取り上げて分析する。記述は「a」＝「講演を聞いて当事者意識に目覚めた。自分で主体的に行動しようと思った」に該当するもの、「b」＝「講演で語られた言葉によって、関心やリアリティを想起している」に該当するもの、「c」＝「課題を知識として捉え、一人称ではないが、社会にとっては必要と認識している。取りあえず関心を持った」に該当するもの、「d」＝「講演で得た知識から関心を他の領域に広げている。他の分野の知識と関連させて関心を広げている」に該当するものにそれぞれ分類した。平成24年度のシンポジウムでは、仕事と生活についての現状認識と教員が当事者としての課題から講演することで、学生に教科書的な知識にリアリティを持たせることが意図された。しかし、このシンポジウムでの課題は、男女共同参画の授業で語られることが、あくまで男女共同参画に関わることだけであり、その他の分野では全く関係がないかのような感想を抱く学生に対してどのような学習機会を用意すればよいかということであった（廣瀬 2014）。高知大学男女共同参画推進室はシンポジウムの企画にあたり、平成25年度のシンポジウムには企業経営、地域の課題に取り組むNPO、島まるごとミュージアムの構想を掲げて島の活性化・環境保全・地元漁師との利害関係の調整に取り組むNPOというように、一見ただけでは共通項が見つけない事例報告を組み合わせた。このように現場の人たちの経験を聞くことで、学生は男女共同参画の視点が特定の領域でなく人間活動の広い範囲で繋がっていることを、それぞれの関心から理解できるようにした（廣瀬 2014）。第7表のシンポジウムの感想を見ると、「a」に該当する回答では28件、「b」に該当する回答は45件、「c」に該当する回答は70件、「d」に該当する回答は28件であった<sup>(註11)</sup>。最も多かった「c」に該当するものでは「・・・がわかった」、「社会は・・・して

ほしい」という回答が多く、例えば「男女共同参画に向けて様々な動きがあることが分かった(15番)」、「男女が共に仕事と子育てを両立できる環境がほしい(51番)」、「出産などで女性が離職すると、同じキャリアに戻るのが困難である。これを復帰できるように改善してほしい(53番)」などがあった。

次に多かった回答は「b」に該当するもので、例えば「自分の将来を考えると、ダイバーシティも身近なものに感じられました(18番)」、「多様性を表現するのに皿鉢料理を用いたのはすごく良い例だと思った。公務員の仕事に興味をわいた。女性を差別なく大切に扱う会社は男性にとっても働きやすい会社だと感じた。このような会社で働きたい(34番)」、「実際に働く女性の環境を知って、安心しつつ、就職先の理想が高くなってしまった。労働する時間というのは私達の人生で多くを占めるので、人間らしく生きるための労働条件というのを自分で選択しなくてはならないと思った(38番)」、「女性が会社に従事するにあたって、子育て支援があるのは非常に大切なことだと思う。わたしも数年後に就職するわけで、これはとても身近に感じた(41番)」、「講師の先生方の実体験を直接聴けて良かった(63番)」、「柏島が地元近く、とても身近な話でとても面白かった(74番)」、「ダイバーシティという考え方がビジネスや社会の成長につながることに驚いた(103番)」のように、就職など自分の近い未来に関係がある、自分もやってみたい、初めての情報に驚いた、体験談にリアリティがあった、良く知っている場所が話題になっていたなど理由は様々であるが学生は自分なりのリアリティを感じ取ったようである。

次に「a」に該当するものでは、自分もこうなりたい、自分はこうしていきたいというように、主体としての自分の考え方の変容や自分が実際に行動してみたいという意味が感じられる回答が多かった。例えば、「自分もこういう一員になりたい(48番)」、「今日学んだ知識を少しでも明日からの自分の視点につなげていきたい(62番)」、「子どもができれば、子育てに率先して参加したい(67番)」のような回答があった。

最後に「d」に該当するものでは、自分なりに発想

<sup>註11</sup> 1件の回答にabcdのように複数の分類をする場合を含めている。

を広げていったことがわかる回答が見られた。回答には例えば次のようなものがあった。「いろんな話題、女性就職などから、高知の企業、名産などの話があったが、相関のちしきが増え、認識ができた(22番)」、「職場環境や家庭環境、哲学的視点から社会や労働のあり方、男女共同参画の多様性を知ることができ、また違った観点で物事を理解することができた(39番)」、「違う観点からダイバーシティをとらえられていて、非常に勉強になった。女性の社会進出が未来にとって最重要課題であるのは知っていたが、今日のパネラーの報告で方法論も見えてきたと感じる。日高村わのわ会の活動は地域の為だけでなく、様々な人が活躍を通して生きていることの意味を見つけていることがよく分かった。少子高齢化で悩む全国の町や村のお手本になると思う。岡野先生<sup>(註12)</sup>のお話も非常に勉強になった。哲学という自分とは距離を感じていた分野も人間の歴史として非常に興味を持てた(57番)」、「マルクスの話を受けてよかった。マルクスからのケア・ワークの流れが、パネルディスカッションの高知の話聞いた後だったのでとても納得した(92番)」。一見関係なさそうな知識に相関関係を見出すことで、自分のダイバーシティ、ケアについての理解が深まったという意見が多く寄せられた。

平成25年度のシンポジウムの試みはアンケートの回答からも、様々な分野で活躍する演者の話は男女共同参画が特定の教科の領域のものではなく、広く人間生活に関係していることを学生に気付かせた点で成果があった。しかし、男女共同参画を教育として捉えた時に、講義にシンポジウムを組込むスタイルの授業にもある課題が見えてきた。次に、その課題について考えてみたい。

#### 4. 対話からの学習

「主体の意識を変える教育」はどうすれば実現できるか。先述のように、同じ情報であっても、その情報

<sup>註12</sup> 同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の岡野八代教授を招待講演に招き、「社会づくりへの参画～働くこと、生きること」と題して、これらのテーマを古く哲学者がどのように考えてきたかについて聞いた(平成26年2月9日)。

を複数の主体がどのように受信し、処理したかを共有することで、お互いの異文化を知ることも大切なことである。コミュニケーションを取ることが苦手な若者が増えてきていると指摘される中で、同じ授業を受けている同年代の学生が就職や結婚、出産、育児、介護についてどのように考えているのかについて、面と向かって知り合う機会は意外と少ないのではないか。このような機会をつくることで、学生は発表や対話を通じて、他人の経験を自分自身のそれと照らし、他者と比較することでより多角的に自己を評価できる。

シンポジウムに参加することで、学生は著名な研究者や実務家等から刺激的で具体的な話を聞くことができる。アンケートの感想に多様性が見られるのも、話の内容から自分の関心にあった情報やメッセージを各々受け取っている証拠である。参加した学生の中にはシンポジウムの内容について友人と意見交換する者もいよう。しかし、多くの学生は講演の主催者側からのフィードバックがなければ、他の学生の感想について知る機会は少ない。そこで、学生がシンポジウムや講義の内容について友人と意見交換する機会を設けるために、平成26年度の共通教育「男女共同参画社会を考える」で対話型の授業として「キャリア・ジャングルジム」及び「ワールドカフェ：これからの生き方・働き方」が実施された。

##### (1) キャリア・ジャングルジム

「キャリア・ジャングルジム」は、大学1、2年生を対象に開催されたキャリア形成支援のプログラムで、垂直に上昇するキャリアだけでなく、状況に応じた工夫をしながら色々なルートで登って行けるキャリアを踏まえて、自分に合った



写真1  
キャリア・ジャングルジムのチラシ

キャリア・デザインを考える目的で開催された。このセミナーは、高知大学男女共同参画推進室とこうち男女共同参画センター「ソレ」が共同で企画し、共通教育「男女共同参画社会を考える」と連携して実施したものである。講義の履修生は「キャリア・ジャングルジム」への出席が出席日数に反映される。この講義には61名の履修登録者があり、過半数が男子学生であった。講師は、大学生の就職活動や企業の実情に詳しい、株式会社ハナマルキャリア総合研究所の上田晶美代表が務めた。この講義は全4時限で構成し、1限目に基礎知識、2限目には高知県で活躍する3人の社会人ゲストによるパネルトークが行われた。

社会人ゲスト1人目の株式会社ファースト・コラボレーション（高知市）の武樋泰臣社長から、社員第一の経営が会社の業績アップにつながった事例について報告があった。同社は不動産仲介業界の常識とは全く違うスタイルをとっていて、ノルマなし、就業時間は自分で決める、勤務の合間を見つけて買い物OK、保育園のお迎えOK、お昼寝OKという方針を持っている。同社は女性が働きやすい職場環境を従業員全員で考えることで、職場全体が主体的に協力し合える風土をつくった。売り上げも順調に伸び、グループ企業の顧客満足度でも常にトップランキングに入り、従業員第一の会社は顧客からも高く評価されているという。社会人ゲスト2人目は、「子育て支援 ろばみみ」（香美市）代表で、「月刊お母さん新聞・高知版」でもある高木真由美編集長に、臨床検査技師として8年勤務した後、子どものアトピー症の経験から、アレルギーの子どもが楽しめるカフェを立ち上げた経緯について報告があった。アイデアに賛同した母親が「お母さん業」と兼業でできるカフェづくりに取り組んだ経験から夢を実現するための協力者の作り方について話があった。社会人ゲスト3人目は、学校法人高知学園高知小学校（高知市）の渡辺一平教諭から1年間育休を取得した時の経験について報告があった。2人目の子どもの出産を機に育休を取得しようと考えた理由、職場における育休取得のための準備活動、育休を取得したこと得たことについて具体的な体験談があった。



写真2 キャリア・ジャングルジムのパネルトークの様子

アンケートの回答では、「バーチャルの世界だけでなく、実際に人に話を聞くことは大切なことだと感じた」、「自分にとって新鮮な話で発見があった。渡辺先生の話は自分に置き換えて話を聞いて身につまる思いだった」、「講義ではわからない当事者の体験談や思いが聞いて興味深かった」などの感想があった。

「キャリア・ジャングルジム」の1、2限は、3、4限のグループワークをするために学生が共通の知識や経験を持てるようにデザインされている。グループワークの時間には、学生は別の教室に移動し、8人が1つのグループになって「働くこと」についてKJ法を使ったブレインストーミングが行われた。さらにグループメンバーから出されたキーワードを内容ごとに分類し、グループ・ディスカッションのテーマが決められた。アイスブレイクを省いて、すぐにディスカッションに入ったが、講義を通じて得た共通の知識が土台となって、自然に話を広げられたようであった。各グループで議論されたことは全体会で共有する機会が設けられた。アンケートの回答（36件）では、「同じ講義を学んだのに、それぞれ違うテーマを選んだことは、ひとりひとりが違う意見を持った結果だと思った」、「すべてのグループが違うテーマを取り上げていて考え方の多様性を感じた。新しい知識もたくさん取り入れることができたし、同じ事例でも違う考え方を持っていると気づけた」、「同じ授業を受講したのに、様々な考えや感想を持った人がいて、それを共有できたのでよかった」、「他の人との意見交換を通して今後自分



たちが何をすべきかが見えてきた」、「他人の意見を聞くことによって新たな発見があるのを改めて感じた」等の感想があった。また、「男女共同参画社会をつくるために、自分たちが傍観者としてではなく当事者としてアクションを起こしていくことが大切だと思った」、「一歩踏み出す勇気、育児休暇を自分自身が取得するときに、これが大切で全てではないかと思った」等、自身が当事者として行動に結び付けたいという言葉が多く見られた。

一方で、グループ・ディスカッションに難しさを感じたという意見もあった。例えば、「グループ・ディスカッションでは皆のリーダーシップに圧倒された。自分はあまり意見を言うことができなかった」、「自分は人と話すことが得意ではなく、今回もあまり意見を言えなかった。やはり、自分の考えを伝えるのは難しいと改めて思った」という意見が多く見られた。「キャリア・ジャングルジム」は、キャリア・コンサルタントが担当したことからもわかるように、就職活動の面接で自分をよりアピールする、グループ・ディスカッションのなかで、その名のとおり「議論」を意識されていた。実は、「キャリア・ジャングルジム」は翌日に実施行われる、相手の意見を否定しない「対話」の学習である「ワールドカフェ」と対をなしてデザインされている。



写真3 「キャリア・ジャングルジム」のグループ・ディスカッションの様子

## (2) ワールドカフェ：これからの生き方・働き方

ワールドカフェ<sup>(注13)</sup>は「知識や知恵は機能的な会議室で生まれるのではなく、人々がオープンに会話を行い、自由にネットワークを築くことのできる、まるでカフェのようなリラックスした空間で創発される（ブラウン他、2007）」という考えに基づいたグループワークの手法である。平成26年9月25日に実施された「ワールドカフェ：これからの生き方・働き方」では、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科の萩原なつ子教授がファシリテーターを務めた。4人一組のグループでアイスブレイクの「9マス自己紹介」が行われた。これは9マスに折られた紙に自分に関する9つのキーワードを書き、キーワードに沿って自己紹介するというものである。

さて、グループごとに「仕事」について抱くイメージの洗い出しの作業をさせると、社会人経験が無いこともあってか、意外と苦勞している学生が目立った。ファシリテーターによる30分のミニ講義で知識を整理した後で、新しいメンバーでワールドカフェが始まった。ワールドカフェではラウンド毎に話し合いのテーマを設定する。今回のワールドカフェでは3ラウンドが設けられた。ラウンド1は「仕事に男女の区別はあるか（必要か）」、ラウンド2は「性別に関係なく、働き方・仕事を選択できる社会にするにはどうすればよいか」、ラウンド3は、「ラウンド2のテーマについて、色々な意見を探り入れながら考える」であった。初めのラウンドが終わると1人のホスト以外のメンバーは「旅人」として他のグループに移動する。ホストはこれまでにグループで話し合われてきたことを紹介しながら、新しいメンバーと対話を続けていく。最終ラウンドになると「旅人」はホームに戻り、他のグループでの話し合いで得た情報を持ち帰ってホームのメンバーと共有する。

<sup>注13</sup> アニータ・ブラウン（Juanita Brown）とデイビッド・アイザックス（David Isaacs）によって、1995年に開発・提唱された手法。知識や知恵は、機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話を行い、自由にネットワークを築くことのできる「カフェ」のような空間でこそ創発される」という考えに基づいた話し合いの手法。（ブラウン他2007年）。

ワールドカフェではトーキング・オブジェクトを使用することがある。今回のワールドカフェではカラーボールが使用された。今回のワールドカフェのルールではボールを持っているメンバーが話すことができ、他のメンバーは話者の話をしっかり聞くことが求められる。話者は、自分の話を終わると次に話を聞きたいメンバーに向けてボールを転がす。

前日のキャリア・ジャングルジムがリーダーシップ育成や自己アピールを意識したグループ・ディスカッションであったのに対して、ワールドカフェは「だれかの意見を否定しないこと」を意識した「対話」を目的としている。否定されない安心感が緊張を和らげ、意見を出しやすい雰囲気がグループに生まれる。アンケート（31件：女性7人、男性24人）の回答には、自分から話し始めることに戸惑っていた学生も「ボールを持った人の話を聞くシステムのおかげで意見を伝え、人の意見も聞いた。メリハリがあって対話が盛り上がった」、「ひとりひとり話す機会が与えられていた」、「討論形式とは違い他人と意見が共有できた」等の感想があった。ある学生からは「自分の口からこんな言葉が出て驚いた」という感想も聞かれた。直前に「男女共同参画社会を考える」の講義を受けたことで、共有した経験が話し合いの土台となって、対話を自然に広げることが出来たのだと思われる。

アンケートの回答には、「議論や討論と違って、相手に否定されない安心感から、いつもより自分の言いたいことを伝えられた」のように、対話式のグループワークに対する良好な感想が見られた。「リラックスしたムードの中だからこそ、学年関係なく色々なことが言える。やはり1回生と4回生では考えている事の深みが違う」、「他人を肯定できることは素晴らしいことだと思う。拒絶したらそこで終わりだが、相手の意見を受け入れることで自分の視野が広がっていく」、「違うひとと意見交換ができて、自分の意見と比較し、考察できたのは新しかった」、「移動していくことで様々な人の意見が聞いた。違う意見が入ってきたり、同じ意見で深めていけたりするのがとてもよかった」、「いろいろな人と話した後で、最初のメンバーとまとめるこ



写真4、5 ワールドカフェにおける対話の様子

とで、さらに話が膨らんだ」、「自分と同じ意見の人、全く違う意見の人など本当に様々な人の意見が聞いた。本気で考えて伝えることがすごく楽しいことに気付いた」、「ディスカッションやディベートとは異なった雰囲気の中で話し合い、他人の意見を否定することなく肯定的に受け入れることができた」、「グループがアットホームな雰囲気でお互いに意見が出やすかった。話し合いを通じて、これまでの講義内容が頭に入ってきた」、「数回席替えをただただで教室すべての人と話し合えた気分になった」、「本当に全員と話した気になった」などの感想が見られた。

## 5. 授業スタイルの分析

大学における学びのあり方について、学生が「知識や技能をダウンロードするかのようにな身に付ける」ことで良いと考えているとすれば、教員の講義も学生が受けとめるかどうかは自分次第と済ますこともできる。しかし前述の平成22年度中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を養成する大学へ』では、「学生に何を教えたか」ではなく、「学生が、何が出来るようになったか」への大学のパラダイムシフトの必要性が示されていた。大学における男女共同参画は、男女共同参画社会論など学問的な枠組みとしての取り組みも見られるようになったが、男女共同参画社会の推進という目標を掲げた場合、教員も学生も当事者意識をもって日常の実践活動に活かしていくことが大切である。その意味では男女共同参画の取り組み

は社会実践である。大学で男女共同参画を推進するに当たって、授業は教員と学生が知識や経験を共有するために最もふさわしい機会のひとつとなる。高知大学男女共同参画推進室では、これまでも「男女共同参画社会を考える」のリレー講義と男女共同参画に関するセミナーやイベントを組み合わせることで、学生の男女共同参画についての社会実践を促してきた。この取り組みは学生のみならず、リレー講義を行う異なる専門の教員に対しても男女共同参画を身近にひきつけて考えてもらう好機でもあった。高知大学男女共同参画推進室では、「男女共同参画社会を考える」の講義を通じて学生がより効果的に男女共同参画を社会実践につなげていけるために、第8表のようにシンポジウム型・対話型講義の特徴についてまとめ、平成24年度・25年度のシンポジウム、平成26年度のキャリア・ジャングルジム、ワールドカフェの企画に役立っている。

平成24年度には「男女共同参画社会を考える」の初日にシンポジウムを実施し、リレー講義で専門が異なる教員の講義を聞くうえで共通に持つべき男女共同参画の視点及び男女共同参画の課題に対するリアリティを獲得させる目的で、教員が当事者視点から「仕事とライフ・イベントの両立」について講演を行った。平成25年度のシンポジウムでは、男女共同参画について敢えて誘導は行わずに、企業、地域づくりのNPO、環境保全のNPOの異なる分野のゲストからその実践的な話を聞き、学生自身がそこから共通する課題や男女共同参画の視点に気づくことが期待された。この2回のシンポジウムでは所期の目標が得られたが、課題としてシンポジウムから学生が得た学びや感想を学生同士で共有・比較し、自分の考えを見つめなおす機会が少ない点があげられた。そこで、平成26年度の企画ではシンポジウムの開催を見送り、学生が他の学生と授業で考えたことについて意見交換し、自分の考えをより深化させ、あるいは異なる意見によって研磨される機会を設けるために議論や対話の時間を重視した「キャリア・ジャングルジム」、「ワールドカフェ」を開催した。

当初、2つの事業は共通教育ではない別の機会に実

施することを検討していたが、議論・討論・対話に頼った学習では参加者がすでに持っている知識や経験の範囲での作業となりがちである。例えば、職場文化を共有する社会人であればワールドカフェは、自分の経験を整理したり、他人の経験の中で相対化したりするうえで効果的であろう。しかし、話し合いに必要な知識を十分持たない状態で学生がワールドカフェで対話をして、大学の授業としての効果は半減してしまうのではとの不安があった。そこで高知大学男女共同参画推進室は、学生が「男女共同参画社会を考える」のリレー講義で多様な観点から学ぶインプットの機会と、自分の気づきや疑問を同じく講義を受けた学生と確かめ合うアウトプットの機会を連続して設けることで、効果的な学習機会をつくることを企画した。そして、表7に示したようなシンポジウム型、ワールドカフェに代表される対話型の利点・弱点をリレー講義で補完した。この点についてアンケートの回答でも、授業で学んだ知識を引用しながら他の学生と対話ができただことで、学習の理解度が高まったことや、自分が想いもしていなかったことを他の学生が考えたことに刺激を受けたという感想が目立った。今日の社会は核家族化や生活様式の多様化が進んでいて、学生は本やテレビなどでその情報は知っていても、それを経験している当事者から直接話を聞く機会は少ないようである。また、学生は大学の講義で日々新しい知識を学んでいるが、大学生のコミュニケーション不足が指摘されるように、それらの知識について学生同士が話し合い、自らの経験を相対化する機会も少なくなっているようである。このように考えると、多様な学生が集まる大学という場の利点は、講義によるインプットと対話によるアウトプットの機会を作りやすい潜在的環境があることだろう。

## まとめ

本稿では、大学における男女共同参画の推進が単に意識啓発の取り組みではなく、大学全体の教育や社会実践として当事者性から課題探究に向き合うことによって、人間社会を持続的に継続し、社会の形成と維



持に貢献できる男女共同参画の視点を持った人材の育成をすることだろうとの考え、男女共同参画人材の育成方法について模索した。そこで、ひとつの可能性として、学生が学問を通じて社会の常識の非常識に気づき、周囲との意見交換によって自分の意見を相対化し、グループワークでの合意形成を通じて、社会実践として活かせる男女共同参画の授業のあり方について考えた。

そして、高知大学における男女共同参画の教育実践を検証するなかでその長所短所を明らかにした(第8表)。はじめに、2012年(平成24年)から開講した共通教育「男女共同参画社会を考える」は、オムニバス講義の採用と男女共同参画シンポジウムを組み合わせたことで、学生は異なる専門分野を持つ教員から多様な視点から男女共同参画を学ぶことが出来た。また、教員が男女共同参画について当事者としての経験を述べたことで、学生は教科書的な知識にリアリティを付加することが出来た。しかし、これには課題があった。学生は男女共同参画について、就職活動、仕事・介護と子育ての両立などについて意識を高めることができたが、その学びをその他の領域に関連付けて考えを広げるところまでは到達しなかった。そこで、2013年(平成25年)の男女共同参画シンポジウムでは、高知県企業のダイバーシティマネジメントの現在、村の仕事づくりに取り組むNPOの活動、島まるごとミュージアム活動における住民同士の合意形成の苦勞といったように、多様な領域から講師を招いて、人間が関わる活動にはどこにおいても男女共同参画の視点が必要であることについて気づきを得られるようにした。これに対しては、学生は企画者の意図したとおりの反応を見せ、アンケートからは参加者が男女共同参画の視点を自分なりに整理できた様子が見て取れた。しかし、これらの講義にも課題があった。それは、オムニバス講義、シンポジウムで得た知識を使って学生同士が話し合いをする機会が少なかったことである。この反省を踏まえて、2014年(平成26年)にはオムニバス講義のほかに議論と対話に重点をおいたグループワークを組み合わせた。話し合いが中心であると、限られた時間

内で専門的でかつ深い内容に話を持ち込むことは難しい。しかし、オムニバス講義を共通の土台に置いて話し合いをさせることで、講義で得た知識を修正したり、あるいは深めたりすることが出来るほか、グループワークの話し合いも円滑に進むことが確認できた。オムニバス講義、シンポジウム、グループワークにはそれぞれ長所短所があるが、目的に合わせて教科書的な知識に他のプログラムを組み合わせることで、学生の学びに社会実践につながるリアリティを付与できる可能性が大きいことが分かった。

つぎに、2.の「男女共同参画を考える」で述べたとおり、性別役割分業にしても、働き方にしても、自分が生活する社会の常識・非常識を認識することは難しい。しかしながら、日本においても高度経済成長期の生活を経て成熟した社会経済へ移行する中で、働き方、育児、介護など日常生活に近いところがかつての常識が現状に合わなくなってきている状況が顕在化し、社会問題となっている。社会心理学者の山岸(2010)は「社会科学というのは、人々が自分たち自身を自分で縛りつけている状態から抜け出す助けをする学問」と述べているが、男女共同参画の学習も目的は同様である。男女共同参画の課題は、すべての人間にとって日常的に関係してくることが関係しているので、人によって多様な受け止め方がされやすい分野でもある。歴史との比較、地理的な比較、立場による比較等を通じて、男女共同参画を学ぶことは、「自分たち自身を自分で縛り付けている状態」に気づく機会として有効であろう。しかし、それに気づくだけでは不十分である。山岸は次のように指摘する。社会のシステムの中にいる人間は「古いシステムが崩壊するとパニックになってしまう。だから、何とかして古いシステムに戻そうとする。だから、ますます新しいシステムがつかれなくなってしまふ(山岸 2010)」、「新しい制度やシステムを作っても、そうした新しいシステムに適応するために自分の生き方をどう変えたらいいのかわからない(山岸 2010)」。

今日、社会が急速に変化する中で、社会に人材を輩出する役割を持つ大学に対しては、主体的に考え課題

解決に取り組むことのできる人材の育成が求められている。大学において、働き方、育児、介護などの課題を総合的に取り扱う男女共同参画について教育することは、学問的な取り組みと社会实践の取り組みの双方をコラボレーションさせて考えることの重要性を学生に認識させるうえでも意義深いものがある。平成10年の大学審議会で、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探求能力）の育成を重視することが求められる」と述べられた。このように、大学における教育には、学生がダウンロードすれば足りると考える知識の提供に留まらず、変化する社会の状況に応じて、当事者意識をもつ

て学び具体的な課題解決に臨んでいく姿勢を持った人材育成が求められている。

最後に、男女共同参画社会は、老若男女のひとりひとりが社会づくりに参画していくことであり、男女共同参画の人材とは社会の変化に応じて新しいシステムを自ら創っていける人材である。そして、大学で男女共同参画を推進する教育的意義は、学生が学問からの知見で「自分たち自身を自分で縛り付けている状態」に気付き、対話のなかから多様な意見を受け入れ、かつ生活に直結する事柄に対して落としどころを見つけながら合意形成に取り組んでいく社会实践の機会を提供できるところにあると言えよう。

## 資料

第1表 日本の男女共同参画推進の動き（1975年～1999年）

年	出来事（★=国際的なもの）
1975年～1979年	★国際婦人年
1975年	★第1回世界女性会議（メキシコシティ）
1977年	国内行動計画
1985年	★第3回世界女性会議（ナイロビ）
1986年	女子差別撤廃条約批准
1987年	新国内行動計画
1991年	新国内行動計画の第1次改定
1995年	★第4回世界女性会議（北京）
1996年	男女共同参画ビジョンの答申
1999年	男女共同参画社会基本法施行

第2表 共稼ぎ夫妻、4大生活時間分類別、総平均時間の国際比較（単位：時間、分）

		イギリス	フランス	イタリア	スペイン	ベルギー	ドイツ	フィンランド	スウェーデン	日本
妻	生理的時間	10.20	11.03	10.35	10.23	10.51	10.23	10.12	10.17	10.16
	収入労働時間	5.45	6.10	5.52	6.21	4.40	5.09	5.57	5.41	6.15
	家事労働時間	3.55	3.54	5.05	4.32	4.21	4.04	3.35	3.48	4.24
	社会的文化的活動時間等	4.00	2.51	2.28	2.42	4.07	4.25	4.16	4.11	3.07
夫	生理的時間	9.46	10.54	10.35	10.18	10.05	9.49	9.45	9.33	10.31
	収入労働時間	8.04	7.49	8.19	8.25	6.58	7.31	7.25	7.19	9.56
	家事労働時間	1.57	1.54	1.42	1.56	2.16	2.12	2.07	2.25	0.30
	社会的文化的活動時間等	4.12	3.23	3.23	3.20	4.40	4.29	4.42	4.41	3.05

出所：男女共同参画 統計データブック 2009 日本の女性と男性 独立行政法人国立女性教育会館 ぎょうせい

第3表 児童の貧困についての国際比較

相対的貧困率			子どもの貧困率			子どもがいる世帯の相対的貧困率								
						合計			大人が1人			大人が2人以上		
順位	国名	割合	順位	国名	割合	順位	国名	割合	順位	国名	割合	順位	国名	割合
1	チェコ	5.8	1	デンマーク	3.7	1	デンマーク	3.0	1	デンマーク	9.3	1	ドイツ	2.6
2	デンマーク	6.0	2	フィンランド	3.9	2	フィンランド	3.7	2	フィンランド	11.4	2	デンマーク	2.6
3	アイスランド	6.4	3	ノルウェー	5.1	3	ノルウェー	4.4	3	ノルウェー	14.7	3	ノルウェー	2.8
4	ハンガリー	6.8	4	アイスランド	7.1	4	アイスランド	6.3	4	スロヴァキア	15.9	4	フィンランド	3.0
5	ルクセンブルク	7.2	5	オーストリア	8.2	5	オーストリア	6.7	5	イギリス	16.9	5	アイスランド	3.4
6	フィンランド	7.3	5	スウェーデン	8.2	6	スウェーデン	6.9	6	スウェーデン	18.6	6	スウェーデン	4.3
7	ノルウェー	7.5	7	チェコ	9.0	7	チェコ	7.1	7	アイルランド	19.5	7	オーストリア	5.4
7	オランダ	7.5	8	ドイツ	9.1	8	ドイツ	7.6	8	フランス	25.3	7	オランダ	5.4
9	スロバキア	7.8	9	スロベニア	9.4	9	オランダ	7.9	8	ポーランド	25.3	9	フランス	5.6
10	フランス	7.9	9	ハンガリー	9.4	10	スロベニア	8.2	10	オーストリア	25.7	10	チェコ	6.0
11	オーストリア	8.1	9	韓国	9.4	11	フランス	8.7	11	アイスランド	27.1	11	スロベニア	6.7
12	ドイツ	8.8	12	イギリス	9.8	11	スイス	8.7	12	ギリシア	27.3	12	スイス	7.2
13	アイルランド	9.0	12	スイス	9.9	13	ハンガリー	9.0	13	ニュージーランド	28.8	13	ハンガリー	7.5
14	スウェーデン	9.1	14	オランダ	9.9	14	イギリス	9.2	14	ポルトガル	30.9	14	ベルギー	7.5
15	スロベニア	9.2	15	アイルランド	10.2	15	アイルランド	9.7	15	メキシコ	31.3	15	ニュージーランド	7.9
16	スイス	9.5	16	フランス	11.0	16	ルクセンブルク	9.9	15	オランダ	31.3	15	ルクセンブルク	7.9
17	ベルギー	9.7	17	ルクセンブルク	11.4	17	ニュージーランド	10.4	17	スイス	31.6	15	イギリス	7.9
18	イギリス	9.9	18	スロヴァキア	12.1	18	ベルギー	10.5	18	エストニア	31.9	18	アイルランド	8.3
19	ニュージーランド	10.3	19	エストニア	12.4	19	スロヴァキア	10.9	19	ハンガリー	32.7	19	オーストラリア	8.6
20	ポーランド	11.0	20	ベルギー	12.8	20	エストニア	11.4	20	チェコ	33.2	20	カナダ	9.3
21	ポルトガル	11.4	21	ニュージーランド	13.3	21	カナダ	11.9	21	スロベニア	33.4	21	エストニア	9.7
22	エストニア	11.7	22	ポーランド	13.6	22	ポーランド	12.1	22	ドイツ	34.0	22	スロヴァキア	10.7
23	カナダ	11.9	23	カナダ	14.0	23	オーストラリア	12.5	23	ベルギー	34.3	23	ポーランド	11.8
24	イタリア	13.0	24	オーストラリア	15.1	24	ポルトガル	14.2	24	イタリア	35.2	24	日本	12.7
25	ギリシア	14.3	25	日本	15.7	25	日本	14.6	25	トルコ	38.2	25	ポルトガル	13.1
26	オーストラリア	14.5	26	ポルトガル	16.2	26	ギリシア	15.8	26	スペイン	38.8	26	アメリカ	15.2
27	韓国	14.9	27	ギリシア	17.7	27	イタリア	16.6	27	カナダ	39.8	26	ギリシア	15.2
28	スペイン	15.4	28	イタリア	17.8	28	アメリカ	18.6	28	ルクセンブルク	44.2	28	イタリア	15.4
29	日本	16.0	29	スペイン	20.5	29	スペイン	18.9	29	オーストラリア	44.9	29	チリ	17.9
30	アメリカ	17.4	30	アメリカ	21.2	30	チリ	20.5	30	アメリカ	45.0	30	スペイン	18.2
31	チリ	18.0	31	チリ	23.9	31	メキシコ	20.4	31	イスラエル	47.7	31	メキシコ	21.0
32	トルコ	19.3	32	メキシコ	24.5	32	トルコ	22.9	32	チリ	49.0	32	トルコ	22.6
33	メキシコ	20.4	33	トルコ	27.5	33	イスラエル	24.3	33	日本	50.8	33	イスラエル	23.3
34	イスラエル	20.9	34	イスラエル	28.5	-	韓国		-	韓国		-	韓国	

出典：内閣府 平成26年版 子ども・若者白書（全体版）

[http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/b1\\_03\\_03.html](http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/b1_03_03.html)

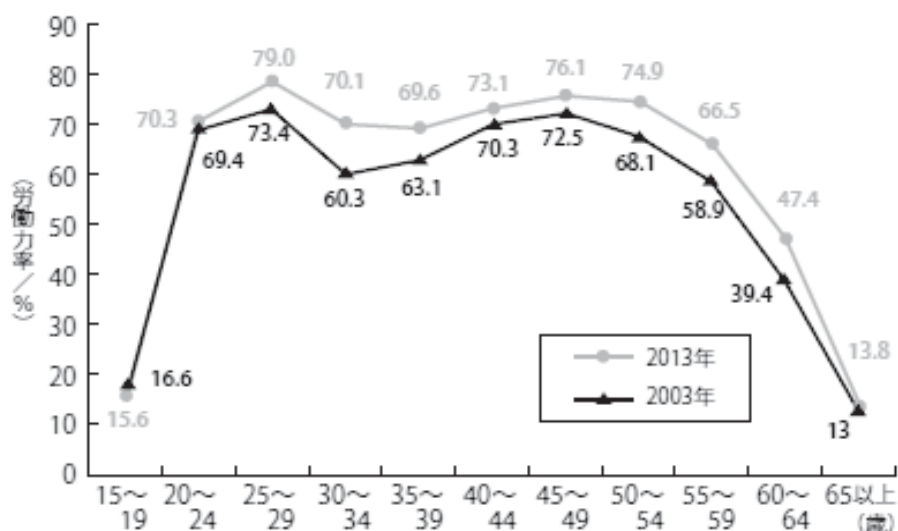


第4表 母子・父子世帯の親の雇用形態，年間就労収入階級別構成割合(2006) (単位：千世帯・万円・%)

区分	雇用形態	世帯数	平均年間就労収入	年間就労収入階級別構成割合					
				総数	100万円未満	100～200万円	200～300万円	300～400万円	400万円以上
母子世帯	総数	1,217	171	100	31.2	39.1	17.7	5.9	6.1
	常勤雇用者	465	257	100	7.1	33.8	32.3	12.9	14.4
	臨時・パート	482	113	100	42.9	49.2	7.3	0.6	
父子世帯	総数	161	398	100	4.3	11.8	21.1	17.7	45.3
	常勤雇用者	121	431	100	0.8	7.4	21.5	19.1	51.2

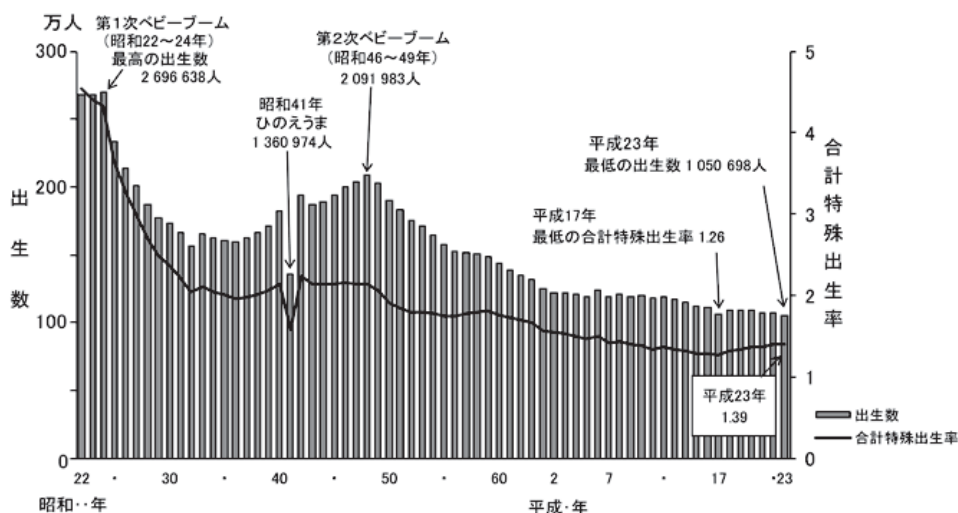
出所：厚生労働省『平成18年度 全国母子世帯等調査報告』、国立女性教育会館『男女共同参画統計データブック2009』より

第5表 日本の女性労働力率



出典 医学書院 [http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA03070\\_01](http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA03070_01) (2015年1月26日)

第6表 出生数及び合計特殊出生率の年次



出典 厚生労働省 平成23年人口動態統計月報年計(概数)の概況 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai11/kekka02.h>

第7表 平成26年度シンポジウムのアンケート（感想自由記述）

番号	シンポジウムの感想	分類
1		
2	職場や地域における男女のちがいや、近代の哲学的な面から見た男女関係、男女の差を知り、学べた。	c
3	男女共同参画社会を考える上で、現在の社会（おもに高知）がどうなっているかを知ることができてとても良かったです。	d
4	男女に関することだけでなく、社会づくりに大切なダイバーシティの考え方を学べた。自分だけの世界にとらわれずに発想を転換することで世界が広がり、よりよい社会づくりを目指すことが出来るのだと思うようになった。	ad
5	多様な面で活躍されている方のお話が聞いて大変勉強になりました。埋もれている人材や隠された能力に私達が気づく事も大切だなと感じました。	c
6	様々な多様性を受け入れていくということは、とても重要なことであると感じた。今回のシンポジウムで、色々な方の話を聞くことができて、とても良い経験をさせてもらったと思う。また、個人的な意見だが、トマトソースを一度食べてみたいと思った。	ad
7	多様性について、様々な視点から見る事ができたので、自分の多様性についての考え方が広がった。女性は男性とは異なる視点を持っているため、様々な新しい意見がでてきて企業力の向上にもつながるとも学んだ。哲学の面からも多様性を見ることもとても勉強になった。	ad
8	女性の社会的立場の変容と、多く知ることができた。男女関係なく、人それぞれの能力や個性に目を向けることが大切だと思った。	a
9	多様性について、企業地域と様々な場での取り組みが行われていることを知り、その重要性、可能性について考えることが出来た。また、活動の多様性の1つ1つが大切であることがわかった。	c
10	見たこと、聞いたことのない企業のお話など、貴重な時間となりました。柏島、沖ノ島の話は私の所属コース的にも関連強いので、とても興味を持つことができました。	bcd
11	就活が始まり、仕事さがさらに身近に感じる中で、興味のある話が聞けたと思う。	bc
12	女性の社会問題などといった、今、とても問題となっていることが、とても身近に感じる事ができたのは、大きかったと思います。	bc
13	特に多様性を意識せずとも、効率化を図るためには、ダイバーシティの考え方を取り入れるべきだと感じた。	c
14	ダイバシティの考え方が今の世に必要なことが分かった。	c
15	男女共同参画へむけて、様々な動きがあることがわかった。	c
16	わのわ会のように働きやすい所だと楽しく仕事ができ、長く働くことができるのではないかと感じました。柏島の漁業とダイビングのすみわけなどの話で様々な人が共同して社会を、環境を守ることも重要だと考えました。岡野さんの話を聞き、労働についての哲学的観念を知ることができ納得させられました。様々な労働についても知ることができました。	bc
17	「ダイバーシティ」という言葉を初めて知りました。「多様性を認めるといっても、経済との両立は難しいのでは？」と思いました。しかし、実際に労働者を大切にすることで成功している企業の話なども聴くことができ、とても興味深かった。	c
18	自身の将来のことを考えると、ダイバーシティも身近なものに感じられました。	b
19	とてもためになる話でした。皆さんがそれぞれ第一人者なので、経験からくる言葉は重みがあるなぁと思いました。	b
20	育児に対する対応とかの良い企業も増えて来ていて、とても良いと思った。貴重な話が聞いて良かったです。	c
21	貴重な話を聞いて良かったです。ダイバーシティなど、知らないことを知ることでもできて良かったです。	c
22	いろんな話題、女性就職などから、高知の企業、名産などを話しましたが、相関のちしきが増え、認識ができました。女性▲できる女性、女子力の強さが認識しました。そして、地方企業、自然など紹介され、社会の構成、自分できること、人を助けることを新しくられました。	d
23	哲学者によって、時代とともに労働への考え方が変わってきたことが分かりました。ダイバーシティを重要と考えることが男女共同参画社会をつくる上で重要であると思いました。	c
24	今回、様々な企業や地域の取り組みを知ることができて本当によかったです。今まで自分の知らなかったことを多く学ぶことができました。女性の力が求められていることを改めて知り、これから自分も含めて女性が働きやすい環境がさらに広がれば良いなと感じました。	c
25	日高わのわ会の講演が興味深かった。	b
26	職種、性、国籍など1人1人違う状況の中で、衝突はあると思うが、それをうまく利用して社会がうまくまわっていくことが大切だと思った。	c
27	多くの人の考え方や、方法などを聞くことをでき、とてもためになった。	c
28	異なった分野の人達からのダイバーシティの考えを知れて楽しかったです。昔の人の考え方凄くかたよって聞いていて楽しいです。	c
29	テーマがいろいろとあり聞き飽きなかったと思う。ただ、興味もてたかどうかという微妙なところである。	d
30	ファースト・コラボレーションの子育て支援実践の取り組みはとてもすばらしいと思いました。	b
31	男女共同参画社会を考える上で多様性という考え方をしっかり理解していく必要があると思った。日高村の方が柏島など一見何の関係もないように思えたが、多様性は特に未分野からとらえることができるのだということに気がついた。様々な立場の人たちがいるということをしっかり理解してそれぞれが尊重されなければならないと思った。	d
32	パネルディスカッションのダイバーシティ経営についての話か、柏島のダイバーと漁業者の関わり合いについての話が非常に興味深く面白い話だったと思う。	b

(次頁に続く)

33	今日の講義では働きやすい環境づくりによって、それが評判となり新たな良い人材の獲得につながるという良いサイクルが作れるというところが印象的であった。また、高齢者や障害者などが参加するダイバーシティについても、大変良い話を聞くことができた。	b
34	多様性を表現するのに皿鉢料理を用いたのはすごくよい例えだと思います。また、公務員の仕事に興味がわきました。女性を差別なく大切に扱う会社は男性にとっても働きやすい会社だと感じました。このような会社で働きたいです。	abd
35	男女は常に平等であってほしいと思った。	c
36	現代社会には女性力は不可欠であるので、女性（及び外国人）が公平に仕事に参加するには、労働人口を増やし、優秀な人材を確保でき、女性など独特な視点によって新たな方法を創造できる。これは人の価値を実現するだけではなく会社、地域、国家にも非常に重要である。女性への就業支援と仕事環境整備は、我々の努力の方向でこの社会に活▲を作り、社会の多様性を▲進する。	c
37	哲学のような視点であったり、NPO 法人や高知県庁、企業においての具体的な活動作りであったりを通して、男女、また年齢や障害の有無などを関係なしとして人々が活動する社会の良さ、大切さを知ることができた。またそのような社会のために活動する人々の多さというのを感じることもできた。	d
38	泉田優さんが話してくれた、実際に働く女性の環境を知って、安心しつつ、就職先の理想が高くなってしまった。労働する時間というのは私達の人生で多くを占めるので、人間らしく生きるための労働条件というのを自分で選択しなければならないんだなと思った。	ab
39	職場環境や家庭環境、哲学的視点から社会や労働のあり方、男女共同参画の多様性を知ることができ、また違った観点で物事を理解することができた。	cd
40	今回のシンポジウムで企業で女性が働きやすくなるように様々な工夫がされているのが分かってよかった。また、仕事をする事について考えさせられた。	b
41	女性が会社に従事するにあたって、子育て支援があるのは非常に大切なことだと思います。私も数年後に就職するわけで、これはとても身近に感じました。	b
42	現代と古代の奴隷に対しての考え方が逆だったので驚いた。いつからなぜ今のような考え方になったのか気になる。	c
43	有名人の名前も多く出て来て過去の偉人も戦ったのが分かりおもしろいと思いました。	c
44	自分に役立つことばかりであり、とても身近な問題であると思いました。	b
45	新たな方式を採用することで利益が増すことは興味深かった。	c
46	というのが多様なのか理解できた。	c
47	たくさんの方の講演を聞いて楽しかったし、おもしろかった。特にダイバーシティの考え方はこれからの世の中に必要不可欠な考え方だと思った。パネルディスカッションは楽しみにしていたのだが、なくなって残念だった。	c
48	いろいろな方のお話を聞くことができてとてもいいシンポジウムでした。自分もこういう一員になりたいと思った。	a
49	たくさんの方の貴重な話を聴くことができて良かったです。女性が産後でも働けたり、メインで活動ができることは今後とても役に立つと思います。	b
50	普段の生活では聞く事のできない貴重な話が聞いて良かった。	c
51	男女が共に仕事と子育てを両立できる環境がほしい。	c
52	男女平等といっても、実際職場で働く女性は少ないという現状があるので、もっと本格的に取り組む必要があると感じた。	c
53	出産などで女性が離職すると、同じキャリアに戻るのが困難である。これを復帰できるよう改善して欲しい。	c
54	この講義では4人の先生の話をお聞きしましたが、社会づくりや経営、日高村のことや高知県の海洋の話など、自分の知識にはなかったものを多くを教えてもらうことができました。また労働についての話はとても興味深かった。	bd
55	職場で平等だと思う人が28%と低いことに対して、やはり男女共同参画社会への実現の難しさが見えると思います。もっと男女で分けるのではなく、個人の能力の差によって分けていける社会を作らなければならないのだと考えさせられました。	a
56	高知県庁などの地方公務の場でも、男女共同の動きが始まっていることを知った。日高村のシュガートマトを用いた起業の例は、地域産業のすばらしい形をなしている。このような地元産業により、地域の人々がいきいきと生活できるのはとてもいいことだと思った。	b
57	3名様、皆様から、違う観点から、ダイバーシティをとらえられていて、非常に勉強になりました。女性の社会進出が未来にとって最重要課題であるのは認知していましたが、今日のパネラーさんの報告で、方法論も見えてきたと感じます。日高村わの会の活動は、地域の為だけでなく、様々な人が活躍を通して生きていることの意味を見つけていることがよく分かりました。少子高齢化で悩む全国の町や村のお手本になると思います。岡野先生のお話も非常に勉強になりました。哲学という自分とは距離を感じていた分野も人間の歴史として非常に興味を持ってました。	cd
58	労働の重要性と大変さを学ぶことができた。これからは男性だけでなく、女性の力も必要になっていくのだと思った。	c
59	人それぞれの役割りなどがあるので、それぞれが出来ることをし、出来ない部分を補ない合うような会社、社会が良いと思った。就活に向けて、色々学んでいきたいと思った。	
60	人を大切にしている企業には良い人材が集まるということが心に残りました。また、年齢、性別、障害の有無などに限らず、一人一人が良いところを持っているので、それをいかしていけば大きな力になると改めて思いました。どんなことでも先入観や偏見もたたりせず、皆が協力しあうことが大事だと感じました。	abd
61	いろいろな仕事の話を受けてこれからの就職に関係しているので、この話を聞いて良かったです。男性と女性の差別なく働ける社会がこれからできていったらいいと思います。	c
62	普段中々考えることのないようなことばかりでとても考えさせられる語録をきけて本当に良い貴重な経験になりました。今日学んだ知識を少しでも明日からの自分の視点につなげていきたいです。	a

(次頁に続く)



63	講師の先生方の実体験を直接聴けて良かった。	b
64	ダイバーシティとはどういったものか、またその重要性について理解できたと思う。だが、今の日本社会においてダイバーシティはまだまだこれからといったように思う。	c
65	様々な人から、多角的な問題の考え方を聞くことができた。	c
66	たいへん参考になりました。	c
67	子どもができれば、子育てに率先して参加したい。労働についての本来の定義を知ることができよかった。	ac
68	労働がもっと男女参画になれば良いと考える。	c
69	ダイバーシティとはどういうものなのか分かった。日本ももっと男女関係なく働きやすい国になっていけば良いと思います。	c
70	様々な職種の人の話を聞いて、とても自分のためになりました。	b
71	大学の授業では聞けないことをきけて本当おもしろかったです。	d
72	働くという上で、1人1人のモチベーションや、意識というのかどうかかわるのかというのが、今の日本の現状で大きく左右されるのではないかと思います。今日講義を通して、すごく新しいことを学べてよかったです。	b
73	時代が変わり社会も変わっていき、考え方も変わっていくことに対して、一世代の考えを押しつけることはよくないし、変わっていかないといけないと良い社会はつくれないと思った。	b
74	柏島が地元近く、とても身近な話でとても面白かったです。	b
75	「男女共同参画社会」という1つのテーマだけど、地域活動から政経まで、幅広い分野の講演が聞いてよかったです。	d
76	働くことは、生きていくことであり、そのために働く場というものを平等に与えるということは大事なことであり、今後も考え続けていかなければならないことだと実感しました。	b
77	専門の先生からこのような話を聞くのは初めてだったので、自分で考えるきっかけにもなりました。将来のことを考え、ただ男女平等だけでなく、よりよい社会で生きていきたいと思いました。	ad
78	この授業ではじめてシンポジウムのことを聞きました。とても勉強になったと思います。これからはシンポジウムの情報を考えたり、調べたりすることをしたいです。	ad
79	このシンポジウムを聞いたら、日本の職場や政府の構成についてあらためて理解した。これからの選択にとって役に立ったと思う。	b
80	会社を調べて報告する企業が興味深かった。また、柏島という観光で人気の島が海洋レジャーで人気がある反面、漁業との問題がでていることを初めて知った。バランスが難しいなと思った。	c
81	女性や障害をもった人々が普通に労働をするために様々な取り組みがされていると分かった。まだまだ待遇や職場で差があると思うが、差のない社会になるよう、女性や障害者などが積極的に関わっていくべきだと思った。	c
82	日本酒の会社に多くの女性が貢献しているというお話がとても興味深かった。子どもを連れて会社に行けたり、熱が出たら休みがとれたりなどがもっと他の会社で広まればもっと女の人が働きやすくなると思った。	b
83	大学生となってバイトを始めているが、労働条件や給料など今では聞いてもらえていたのではないのかと思った。1万円を稼ぐのにも大変なことであり、両親はすごいなと感じた。	b
84	講演を聞いている中で、興味を持ったのが「島丸ごとミュージアム」です。漁業の島から海洋レジャーの街という斬新なアイデアがとても面白かったです。	b
85	面白い産業改革の案だと思った。	c
86	男女って関係というのは、昔からいろいろあったの今だということが分かりました。それに、それを含めて自分の考えをしっかりもつことが大切だということが理解できました。	b
87	これから社会に出ていくにつれて、就職活動の際、ダイバーシティを意識した社会に貢献できることを意識して企業を選びたいと思った。また、女性の自分もはたらきやすい社会がもっとつくられていけば良いと思った。	a
88	柏島の話は自分が行ったことがあるので興味を持って聞くことができました。ダイバーと漁師の話のように立場が違うことで価値観が違うということを改めて実感しました。	b
89	泉田さんのお話では、あれほどのダイバーシティ経営、女性が働きやすい職場づくりへの取り組みを高知の企業が行っているとは知らなかった。高知での就活に前向きな気持ちになった。「働く」ということについて様々な視点からのお話を聞いて、もう一度考えたいと思った。	ab
90	ダイバーシティの視点から(民主主義的ではない)社会づくりについて、講師の話聞いたことは、社会に出る前の学生である私にとって、すごく勉強になった。特に、時代変化による労働価値の変化は、興味深く、あらがえない価値であると思った。	ab
91	私は2年前愛媛から高知に来ました。来たばかりは高知を全然知らなかったのですが、約2年経った今土地に慣れてきたと思います。でも今日のシンポジウムで私は高知について全く知らないと感じました。印象に残っているのが柏島について、レジャー業と漁業が共存していくために対策を練っていくことに興味を持ち、もっと知りたいと思いました。	ab
92	マルクスのお話を聞いてよかった。マルクスからのケア・ワークの流れが、パネルディスカッションの高知のお話を聞いた後だったので、とても納得した。	d
93	社会における女性の活躍する場を大切にすることで、新しい考え方が生まれたり、更なる高みへ行くことができるという事で▲。古代ギリシャからの社会▲想を深く学ぶことができた。	c
94	今回のシンポジウムでは、日頃お話を聞くことができない方々のお話を聞いて本当によかった。男女共に自分のしたいことができる世の中になりつつあり、これからは、こうした世の中の新たな問題の解決が課題となると感じた。	b

(次頁に続く)

95	普通の生活で新聞やネットから得られるような情報ではないものばかり知識として入ってきて、結婚・就職をひかえた20代女性にとっては大変有益な時間だった。	b
96	働くことや、多様性について、様々な切り口から考えていくことが出来ました。特に最初の泉田さんのお話でダイバーシティの事例が興味深かったです。	d
97	社会や仕事について普段知ることのできないことを知ることができて勉強になった。色々な人の話を聞くことができて良かった。	c
98	今回のシンポジウムでは様々な分野の話を聞くことができて面白と感じました。今までは、例えば男女であるなどの偏見にとらわれた部分も多かったが、これからは皆を平等に扱っていくことが大切だと感じた。	c
99	様々な話しが聞けて色々な社会参画の方法が分かり楽しかったです。シンポジウムという形の講義も新鮮で、興味深かったです。	d
100	男女共同参画社会について、いろいろな場合で授業をしていました。一番心に残ったのは、歴史をさかのぼって、昔の仕事の状況をつみつめて、男女共同参画社会について考えたの初めてでした。自分がこれからちゃんとした環境で働けるように、もっと男女共同参画社会について学んでいきたいと思いました。	a
101	男女共同参画社会のダイバーシティについてとても考えさせられた。	c
102	様々な所で男女が困難な問題に立ちむかっていき、解決していた。社会の発展には男女関係なく多くの人の力が必要と思う。	c
103	経営の話がとても参考になりました。ダイバーシティという考え方がビジネスや社会の成長につながることに驚きました。	b
104	様々な方面の話が聞けて良かったです。	c
105	個人的には帝国データバンクの酒造会社のマーケティングの話が興味深かった。この先、女性向き市場や、女性に対する雇用労働のサポートが増えていくと思うので注目していきたい。	a
106	女性や外国人、地域間、漁師とダイバーの共生について非常に勉強になった。	d
107	4人の方の違った方面からの話を、興味深く聞くことができました。労働基準法に特に興味を持ったので関連書籍を読んでみたいと思いました。	a
108	働くということ、働くという中で自由に決められる事象が多ければ、働くことやその場所を好きになれることがなんとなく分かった気がします。	b
109	皆さん面白くお話しして下さったので楽しく聴くことができました。	c
110	ひとりひとりが輝く社会づくりのためには、企業や地域、都道府県の活動、それぞれが重要な役割を担っているということが分かった。色々な人の話を聴くことができとても勉強になった。	c
111	企業のダイバーシティがもたらす企業全体への効果、社員一人一人への効果が興味深く思いました。	c
112	男女共同参画社会をテーマに、様々な分野、企業の活動やエピソードが聞けてよかった。特に菊水酒造などの企業の話をして下さった泉田さんの講義が聞いていて興味を持った。パネルディスカッションと、ダイバーシティについての講義が一番聞きやすく、学びやすかった。	b
113	スライドが分かりやすく良かったです。ありがとうございます。	c
114	多くの人の話を聞くことができて、良い機会になりました。ちゃんと考えなければならぬなあ・・・と思いました。	a
115	このシンポジウムを通して働くこと、生きることはどういうことか、どういう考えがあるのか、どういう歴史があるのか、何によって生活労働が守られているのかということが伝わってきました。	c
116	いろいろな方々の話、またいろいろな団体の取り組みを知ることができてとても勉強になりました。高知にも、たくさん素敵な地域があるのだと実感しました。	b
117	話がとても聞きやすかった。	c
118	社会に出ることで、男女の差別がまだ残っていると聞き、それを変えられるのは、自分たち若い世代が力を合わせる必要があると感じた。	a
119	自分が就職先を選ぶ際に、男性も女性も生き活きと仕事ができる職場を選ぼうと思った。	a
120	私達も将来就職などで身近に感じるようになるであろう男女共同参画社会のあり方について理解が深まった。特に、高知の自治体や企業が行っているダイバーシティという取り組みは、私たちが働きやすい労働環境をつくるため、これからはますます必要になるであろう活動であると感じた。今日の講演を参考にし、様々な人が共に働くことができる職場のあり方について考えたいと思った。	a
121	このようにめまぐるしく先生が変わって色々な話を聞くという体験は初めてだったので、新鮮で非常に良い体験となりました。中川先生の講義の最後にテストでダイバーシティについて自分の意見を書きましたが、あまりにも稚拙なものだったと恥ずかしくなりました。今後ダイバーシティ（多様性）についての理解をさらに深めていきたいと思ひます。	ad
122	貴重なお話を聞くことができました。	c
123	私はこの講義を受けて、やはり男女共同参画は重要であると感じた。昔からの男尊女卑の考えは今にも残っている。この古くから残るまちがえた考えを正していくことが重要であると思う。	c
124	企業の取り組みや自然と社会との共存への取り組みなど、普段は私の知らないようなことがたくさん聞けてたいへんおもしろかったです。	c
125	男女関係なく、かつ女性を大切にしている会社があり、興味深かったです。	b
126	専門の人から「男女共同参画」について聞いて勉強になった。ダイバーシティについての理解を深まった。	c
127	パネルディスカッションは見えておきたかったので時間の都合で開かれなかったのは残念だ。	

(次頁に続く)

128	特に印象に残ったのは、泉田優氏の「ダイバーシティ」経営のお話です。高知の中の企業にも、育児・出産に協力的な企業があると知り、驚いたと同時にこのような企業がもっと増えたらいいのと思いました。子どもを育てることに協力的な企業は絶対多くの女性たちに支持されるだろうし、私もそういう会社に就職したいです。	ab
129	少し難しい内容でしたが、たくさんの参画社会をのぞくことができよかったです。	c
130	様々な意見が聞けて自分の考えが少し変わりました。	a
131	岡野先生の話、過去の労働条件などの例示が多く、とても分かりやすかったです。人間の価値は Priceless, という言葉を覚えて、自分にとって、価値があるものを見つけていきたいと思いました。	a
132	様々な分野の話聞いて、とても充実した時間を過ごせました。特に、ダイバーシティ経営がとても大切で、これからの会社経営にとって、重要になると思った。	c
133	ぶっとおしで話がつづいたため、せっかくのスピーチがうまく聞きとれなかった。たまに男女共同と話がそれている内容があったのが気になった。	
134	とても参考になりました。	c
135	今までばくぜんとして、女性の雇用機会均等の活動を見てきたが、菊水酒造で実際に利益が出たという例をきいて、こういった例をアピールしていけば、高知のように少子高齢化がすすみ若い男性の雇用が望めない場所やそれ以外にも女性の雇用が進むだろうと思った。	c
136	「男女共同参画」というテーマから、幅広いテーマの話が聞くことができよかったです。	d
137	色々な考え方のダイバーシティを考えることができた。従来の様にとらわれない、新しい見方、新しいニーズが生まれているのだと思った。多方面に関わる人たちの話を聞いて貴重な経験となった。	d
138	とても面白かった。とくに柏島には興味があったのですばらしかった。	b
139	企業哲学等の様々な視点からダイバーシティについて考えていて、非常に興味深かった。ダイバーシティは後の発展を感じさせるシンポジウムだった。	d
140	様々な活動が高知の中だけでもたくさん行われていることを知ることができた。これからさらに多くの人にとっても住みやすい働きやすい環境へと目指す必要があると考えた。	b
141	労働について、古代では奴隷だけが労働や仕事に携わっていた。その時、労働は人間にとって最も重要な活動とはみなされていなかった。「働かざる者食うべからず」であると思う。誰でも人間は働かなければいけないので、無理なく働くべきだと思う。	c
142	今日の講義でシンポジウムについて学んだ。昔の労働環境がとても悪すぎて驚いた。今はそれなりに易しくなったのだと思った。	c
143	とても参考になりました。	c
144	いろいろな話がきけておもしろかった。	c
145	私が社会へ出る頃には今よりもっと共同参画がすすんでいると良いと思いました。多様な考えがあることで多くの可能性を形にできるようになっていけると思えました。	c
146	貴重な話が聞けて良かった。	c
147	大変興味を持ったので明日からまた楽しみです。	b
148	ダイバーシティの重要さと、ダイバーシティは何かと言うのが少しわかった。様々な人がおり、様々な考えがあることが大切であり、尊重されるべきものだった。とても有意義なシンポジウムだと感じた。	c
149	とても勉強になりました。	c
150	数人の方がわかるがわる様々な題についての講義を聞くことができ、ジェンダーやダイバーシティについてのことが学ぶことができました。男性と女性、日本人と外人、漁師さんとダイバーさんなど、様々な人が関わり合うことで向上することが多いと思いました。	d
151	普段の授業とは少し違う形で学べました。男女の差や違いについて考えるきかいがあまりなく、いい機会になりました。	d
152	お話し下さった方が色々な視点から働くということに着目し、講演して下さいおもしろかったです。	c
153	必要な内容がよく取り上げられていると思います。数値が出る内容ではプロジェクターなどを使用すると理解しやすいと思いました。	c

(文書を書いてある通りに入力 ▲は判読不能の文字)

a=講演を聞いて当事者意識に目覚めた。自分で主体的に行動しようと思った。
b=講演で語られた言葉によって、関心や知識にリアリティを想起している。
c=課題を知識として捉え、一人称ではないが、社会にとっては必要と認識している。取りあえず関心を持った。
d=講演で得た情報から関心を他の領域に広げている。他の分野の知識と関連させて関心を広げている。

出所：平成25年度しあわせぶんたんシンポジウムアンケート回答



第8表 シンポジウム型・対話型講義の特徴について

イベント→ ↓特徴	シンポジウム (平成24年度)	シンポジウム (平成25年度)	キャリア・ジャンクルジム (平成26年度)	ワールドカフェ (平成26年度)
知識からの刺激① リレー講義 (知識の共有)	共通教育「男女共同 参画社会を考える」 で様々な専門の教員 が講義をおこなっ た。	共通教育「男女共同 参画社会を考える」 で様々な専門の教員 が講義をおこなっ た。	共通教育「男女共同 参画社会を考える」 で様々な専門の教員 が講義をおこなっ た。	共通教育「男女共同 参画社会を考える」 で様々な専門の教員 が講義をおこなっ た。
知識からの刺激② 学外講師 (知識の共有)	学外の有識者が社会 学の観点でこれから の社会と男女共同参 画について講演し た。	学外の有識者が政治 思想の観点で人間に とって働くことにつ いて講演した。	学外のキャリアコン サルタントが就職活 動の常識について説 明した。	学外の有識者がワー ルドカフェの準備と して男女共同参画に ついて説明した。
課題に対する リアリティ (場所の共有)	男女共同参画推進室 が、大学における男 女共同参画の取り組 みについて説明し た。(大学)	県庁の担当課長が課 題に対する地域行政 の取り組みを説明し た。 (高知県)	高知県で活躍する社 会人ゲスト3人のパ ネルトークを行っ た。 (高知県)	同じ大学の学生が、 所属や学年の垣根を 越えて、テーマにつ いて対話した。 (大学)
課題に対する リアリティ (経験の共有)	学内外の研究者が 「仕事とライフ・イ ベントの両立」につ いて当事者意識から 講演した。	高知県で活躍する企 業、NPO の活動に ついて多様な経験を 持つゲスト3人から 報告があった。	高知県で活躍する企 業、地域活動グルー プ、小学校のゲスト 3人でパネルトーク を行った。	学生自身の経験
課題に対する リアリティ (学びの共有)	あまり機会がない	あまり機会がない	学生が「議論」を通 じて、同じ講義や経 験を活かしながら、 グループワークのプ ロジェクトに取り組 んだ。	学生が「対話」を通 じて同じ講義や経験 の共有から異なる意 見、同じ意見を抱い たことを確認し合 い、学びを共有した。
弱点	学生が対話を通じて 同じ講義や経験の共 有から異なる意見、 同じ意見を抱いたこ とを確認し合い、学 びを共有した。	学生が対話を通じて 同じ講義や経験の共 有から異なる意見、 同じ意見を抱いたこ とを確認し合い、学 びを共有した。	グループワークだけ では学生の関心は引 き出しても知識の共 有が少ない。 リーダーシップや自 己表現力を磨くため には優れているが、 議論に貢献できない 学生が少なからずい る。	グループワークだけ では学生の関心は引 き出しても知識の共 有が少ない。共通す る知識や経験が少な いと対話の内容が薄 くなる。ワールドカ フェをする目的を吟 味して行う必要があ る。
利点	教科書の知識に加え て、教員自身が当事 者として生活につ いて語ることで、知 識にリアリティが加 わる。	男女共同参画の仕 事をしている人以外 から、男女共同参画 について関係してく る話を聞くことで、 学生の関心を引き出 す効果がある。	共通教育科目と合わ せることで、グルー プワークと講義の良 い点が活かせる。	共通教育科目と合わ せることで、グルー プワークと講義の良 い点が活かせる。 普段発言しない学生 も対話に参加しやす く、リレー講義の中 盤で実施すると、共 通する知識や経験も 活かせる。終盤のデ ィスカッションの準 備にもなる。

出所 筆者作成

[参考文献]

- 1) アニータ・ブラウン、デイビッド アイザックス 著、香取 一昭、川口 大輔、2007年、『ワールドカフェ～カフェの会話が未来を創る』、ヒューマンバリュー
- 2) 石原孝二編、2013年、『当事者研究の研究』、医学書院
- 3) 宇佐見義尚、2012年、「キャリア教育で変わる学生と教員 学生中心の教育実践と理念」、清水亮・橋本勝編著『学生・職員と創る大学教育 大学を変えるFDとSDの新発想』、ナカニシヤ出版
- 4) 内田樹、2010年、『街場の大学論 ウチダ式教育再生』、角川文庫
- 5) 木野茂、2012年、「学生とともに作る授業、学生とともに進めるFD」清水亮・橋本勝編著『学生・職員と創る大学教育 大学を変えるFDとSDの新発想』、ナカニシヤ出版
- 6) 経済産業省経済産業局社会経済政策室、2014年8月「成長戦略としての女性活躍の促進」、[www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/.../20131216.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/.../20131216.pdf) (2014年12月15日付きアクセス)
- 7) 清水亮・橋本勝編、2013年、『学生と楽しむ大学教育 大学の学びを本物にするFDを求めて』、ナカニシヤ出版
- 8) 菅豊、2013年、『「新しい野の学問」の時代へ 知識生産と社会実践をつなぐために』、岩波書店
- 9) 高知大学男女共同参画推進室、2013年、「シンポジウム講演記録 江原由美子氏 基調講演」、『国立大学法人高知大学男女共同参画推進室 男女共同参画支援ステーション 平成24年度報告書』、高知大学男女共同参画推進室
- 10) 高知大学男女共同参画推進室、『国立大学法人高知大学男女共同参画推進室 男女共同参画支援ステーション 平成25年度報告書』、高知大学男女共同参画推進室、2014年
- 11) 国立大学協会、「国立大学における男女共同参画推進について-アクション・プラン-」、<http://www.janu.jp/post.html>
- 12) 国立大学協会、2013年、『国立大学における男女共同参画の推進の実施に関する第10回追跡調査報告書』、国立大学協会
- 13) 長谷川伸、2012、「『授業運営委員会』のススメ 学生たちと授業づくりを楽しむ居場所づくり」、清水亮・橋本勝編著『学生・職員と創る大学教育 大学を変えるFDとSDの新発想』、ナカニシヤ出版
- 14) 廣瀬淳一、小島優子編著、2014年、『平成25年度高知大学における男女共同参画に関する意識調査報告書』、高知大学男女共同参画推進室
- 15) 廣瀬淳一、2014年、「大学における男女共同参画推進の教育的意義-当事者意識の喚起による内発的学習-」、『高知大学教育研究論集』第18巻、高知大学総合教育センター
- 16) 山岸俊男、メアリー・C・ブライトン、2010年、「リスクに背を向ける日本人」、講談社現代新書
- 17) 山田剛史、2012年、「愛媛大学の大学全体としての取り組み」、『View 21 大学版、Benesse 教育研究センター、2012特別号 Vol. 3, 20-21
- 18) 山田剛史、2014年、「学生の学びと成長を促進するための学生調査をデザインする」、清水亮・橋本勝編著『学生・職員と創る大学教育 大学を変えるFDとSDの新発想』、ナカニシヤ出版 p.52
- 19) 山田昌弘、2004年、『希望格差社会「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』、筑摩書房
- 20) Dohrenwend, B.S. and Dohrenwend, B.P.: A brief historical introduction to research on stressful life events. In "Stressful life events" Editors: B.S. Dohrenwend and B.P. Dohrenwend), p 1-5, John Wiley & Sons, New York (1974)
- 21) Holmes, T.H. and Masuda, M.: Life change and illness susceptibility. In "Stressful life events" Editors: B.S. Dohrenwend and B.P. Dohrenwend), p 1-5, John Wiley & Sons, New York (1974)
- 22) McKeering, H. & Pakenham, K.L, 2000, Gender and generativity issues in parenting: Do fathers benefit more than mothers from involvement in child care activities? Sex Roles, 43, 459-480.

